

おっぱいだより

新潟市民病院母乳育児推進委員会 平成30年1月

48号

明けましておめでとうございます。今年もおっぱいだよりをよろしくお願ひします。今月のおっぱいだよりでは、今流行中のインフルエンザについてお話ししたいと思います。「インフルエンザの治療薬と授乳」は、当院薬剤師の諸橋さんからお話ししていただきました♪



インフルエンザの治療薬と授乳



毎年流行するインフルエンザ。「予防接種は受けたけれども、インフルエンザにかかってしまいました。」ということは珍しくありません。今回は一般的に使用されているインフルエンザの治療薬と授乳についてご紹介します。

インフルエンザの治療として主に使われる薬には、タミフル（飲み薬）、リレンザ・イナビル（吸入薬）、ラピアクタ（注射薬）の4種類があります。また、解熱剤としてカロナール（アセトアミノフェン）が処方されることもあります。これらの薬を使用したとしても、授乳をやめる必要はありません。薬が母乳に移行する量はごくわずかであり、赤ちゃんへの影響はほとんどないとされているからです。母乳の中にはたくさんの免疫が含まれており、赤ちゃんが病気にかかるのを予防したり、かかって軽く済んだりする役割があるため、薬の副作用のために授乳を中断することはすすめられません。また、できるだけ赤ちゃんへの影響を少なくしようと思い、処方された期間より早く薬を中断してはいけません。特にインフルエンザの薬は、定められた期間使用することによって効果を最大限に発揮します。解熱が早まり、お母さんの体調も早く整います。赤ちゃんのためにも早く治して欲しいですね。

インフルエンザの治療薬について話してきましたが、病気に「かからない」ことが一番です。風邪・インフルエンザが流行している時期です。こまめな手洗い・うがいを心がけましょう。

高熱が出て、医療機関に受診する際は必ず授乳中であることをお伝えください。薬について医師とよく相談されることをおすすめします。また、薬に対して不安がある場合はいつでも薬剤師に聞いてくださいね。





お母さんがインフルエンザ感染中の母乳育児について



インフルエンザ感染中の母乳栄養

日本での全国的な調査の結果、インフルエンザを発症したお母さんに関する赤ちゃんのインフルエンザの発症数の報告は少なく、また、母子感染でのインフルエンザの重症化は見られませんでした。また、薬剤師の諸橋さんの話でもあった通り、母乳には赤ちゃんを感染から守ってくれる免疫物質が含まれています。そのため、お母さんがインフルエンザを発症したからといって、感染予防のために母乳をあげることをやめたり、隔離したりする必要はありません。お母さんの体調が悪く、直接授乳をすることができない状況であれば、健康な第三者に搾母乳を与えてもらうのもよいでしょう。使用する哺乳瓶・乳首は通常通りの洗浄方法でよいです。



赤ちゃんへの感染予防方法

お母さんがインフルエンザ感染中でも、赤ちゃんと一緒に過ごすことは可能です。しかし、インフルエンザは、咳やくしゃみなどの飛沫に含まれるウイルスを吸い込む・口に入ることによって感染(飛沫感染)したり、ウイルスが付いた手で鼻や口を触ることで感染(接触感染)したりするので、マスクの着用としっかりした手洗いを徹底する必要があります。インフルエンザ感染中は、常にマスクを着用し、授乳の前、児・おっぱいに触る前には必ず手洗いをしましょう。インフルエンザは発症してから3~7日間、鼻や喉からウイルスが排出されます。そのため、マスク着用・手洗いは最低でも7日間はしっかり行いましょう。

- ① まず手指を流水でぬらす
- ② 石けん液を適量手の平に受け取る
- ③ 手の平と手の平を擦り合わせよく泡立てる
- ④ 手の甲をもう片方の手の平でもみ洗う(両手)
- ⑤ 指を組んで両手の指の間をもみ洗う
- ⑥ 親指をもう片方の手で包みもみ洗う(両手)
- ⑦ 指先をもう片方の手の平でもみ洗う(両手)
- ⑧ 両手首までていねいにもみ洗う
- ⑨ 流水でよくすすぐ

※手洗い後は、ペーパータオルで水分をしっかりと拭き取る

正しい手洗い方法

インフルエンザ感染が疑われる赤ちゃんの症状

赤ちゃんのインフルエンザ感染を疑う症状としては、発熱、咳、鼻水・鼻づまり、呼吸が早い、眠りがちでぐったりしている、おっぱいを飲まない、などがあります。これらの症状が見られる場合は、病院に受診しましょう。



参考：インフルエンザにおける新生児への対応案（日本小児科学会）

次号もお楽しみに！

